

俱舍論における無表について

阿 部 真 也

北伝アビダルマ仏教独特の考えである無表業については、

既に多くの研究成果が出されている。本稿においては、俱舍論にある無表業（色）の記述について梵本と両漢訳を対照させつつ検討することを目的とする。なお引用は梵語（AKbh. Pradhan ed.）、新訳（正蔵二九）、旧訳（同）の順に示す。

無表（旧訳では、無教）の原語は俱舍論では *aviñāpiti* となっている。この原語より「知らしめることが出来ない」の意があることが分かる。また、両漢訳もその意識である。まず、無表の定義についてみることにする。

① *vikṣipñācittakasyāpi yo 'nubandhah subhāsubhah mahā-*

bhūtāny upādāya sa hy aviñāpiti ucyate (p. 8)

乱心無心等 随流淨不淨 大種所造性 由此說無表 (p. 3a)

乱心無心耶 随流淨不淨 依止於四大 何無教色說 (p. 163c)

界品十一頌で、『乱心や無心の者にも、随流であり、淨や不淨にして、大種によってあるもの、それがすなわち無表と呼ばれる。』と定義している。続く長行においてこの頌を解釈しているのだが

最後の部分に次の二文が出てくる。

② *rūpakriyāsvabhāvāpi sati vijñāpivat param na vijñāpayati* *aviñāpiti* (p. 8)

無表雖以色業為性如有表業、而非表示令他了知。故名無表 (p. 3a)

此法雖以有色業為性不如有教色可令他知。故名無教。 (p. 163c)

③ *saṃāstasū vijñāpisaṃādhisamphūtaṃ kuśalākūśalaṃ rūpanaviñāpiti* (p. 8)

略說、表業及定所生善不善色名為無表。 (p. 3a)

若略說、有教色三摩提所生善惡性色名無教。 (p. 163c)

②では「色と作用を自性とする点は表のようであるが、他に知らしめないから無表である。」として原語の意味に通じる説明をしている。③は、①から②にいたる全体を受けての結論であり「簡略に説けば、表と定とによって生じた善・不善の色が無表である。」とする。以上より、表と定とによって生じる、善・不善で無記ではない、色であり作用を有する、

他に知らしめない、と整理できる。

これらのうち、最も奇妙にみえるのは、色である、という定義である、次に、色である理由についての記述を挙げることにする。それは、色 (rūpa) についての論議 (梵本 p. 9 ~ 10、新訳 p. 35 ~ 6、旧訳 p. 164a ~ b) の中に出てくる。

④ sāpi vijñāpitūpanād rūpita bhavati/vikṣapracalane cchā-yāpracalanavati/
表色有變碍故、無表隨彼亦受色名。譬如樹動影亦隨動。

此亦由有教變碍故、其同變碍。如樹動影動。

⑤ āśrayabhūtarūpanād ity apare

有依所依大種變碍故、無表業亦得色名。

復有余師說、依止變碍故、無教亦變碍。

これら二つの理由を挙げている。④は「表が変化し壊れるから、それ(無表)もまた変化し壊れるものである。樹が動くとき、影も動くようなものである。」とする。俱舍論中で色を「変化し壊れるもの」と定めたのを受けての説明である。しかし、この説は適切でないとしてしりぞけられている。すなわち、表が減したときに無表も減することになり、表業が減したのちの無表業の存続を説明できなくなるからである。そして、⑤の説を有部の正統説として認めている。「所依の大種が変化し壊れるからである、と他は言う」とする。つまり、所依の四大種の性質が無表にもあるのだから無表も変化

し壊れることになり、よって色といえる、という説である。

ここまでの引用により、有部が無表を色としたことはわかるが、更に加えて、無表が仮立ではなく実有であると主張する記述を次に挙げることにする。色とする説に深く関わるからである。それは八の理由に分かれる。まとめて以下に引用する。(梵本 pp. 196 ~ 197、新訳 p. 69a、旧訳 pp. 226c ~ 227a)

1 trividham rūpamuktam sūtra/ tribhiḥ sthānai rūpasya rūpasangraho bhavati/ asti rūpaṃ sanidarśanam sapratigam/ asti rūpamanidarśanam sapratigam/ asti rūpamanidarśanamapratigam iti

以契經說色有三種。此三為處攝一切色。一者有色有見有對。二者有色無見有對。三者有色無見無對。(新)

於經中說色有三種。有三處能攝諸色。有色有顯有碍。有色無顯有碍。有色無顯無碍。(旧)

2 anāśrayam ca bhagavatā rūpamuktam
又契經中說有無漏色。(新)

仏說有無流色。(旧)

na cāvijñaptam virahayāsti rūpamanidarśanamapratigam
nāpyanāśrayam/
除無表色何法名為無顯無對及無漏色。(新)

若除無教色則無無顯無碍色及無流色。(旧)

3 vīdhi cokrā.....na cāvijñaptimantareṇānyamanasopi
punyasābhivīdhiyujyate/
3

又契經說有福增長。……除無表業、若起余心或無心時、依何法說福業增長。(新)

經中又說增長。……若離無教、異緣心人、福德業處不応有增長。(旧)

4 akurataśca svayaṃ paraḥ kārayataḥ karmapathaṃ na sīdhyeyurasatyāṃavijñaptau

又非自作、但遣他為、若無無表業、不応成業道。(新)

若人自不作、但教他作、若無無教、業道不応成。(旧)

5 tatra kiṃ pravajānam syādyadi dharmāyatanaṃtargatam-avijñaptirūpaṃ na paśyeta

若不觀於法處所授無表色者、此言闕滅便成無用。(新)

此言則成無用、若不見無教色在法入授。(旧)

6 aśāṅgaśca mārgo na syādvijñāpitamantareṇa

又若無無表應無八道支。(新)

若離無教色、聖道不成八分。(旧)

7 prātimokṣasamvaraścāpi na syādasatyāṃavijñaptau

又若撥無無表色者、則亦應無有別解脫律儀。(新)

若無無教色、波羅提木叉戒亦不応成。(旧)

8 setuśca sūtre virakṭirukta/ dauṣṭīlyavibandhatvāt/ na vābhavanti seturbhaviṇumārhatītyastyevāvijñaptiḥ

又契經說、離殺等戒名為堤塘戒。能長時相統攝遍犯戒過故。非無有体可名堤塘。(新)

於經中說、遠離戒為塘。能遮邪戒故。若此無不応成塘。(旧)

俱舍論における無表について(阿部)

これらの内、1、2、3、5、6、8は教証であり、他は理証である。中でも最も重要なのは7と8である。7は「また無表がなければ、別解脱律儀もないことになるであろう。」という。そして、8では「經に、遠離は堤塘である、破戒を防ぐから、と説かれている。そして存在しないものが堤塘であることは適切でないから無表は実には有る。」としている。この二つより、無表を受戒と結び付けていることがわかる。以上、俱舍論中の無表について、その一部をみてきた。最初は、行為に伴う余勢といった意味であったと考えられるが有部の教理の発展とともに、色として位置づけ、また、実有であるとしなくてはならなくなったのであろう。そして、受戒における戒体と結びつくことによりその重要性が増していったと考えられる。

〈キーワード〉 無表、色、avijñapti

(大正大学大学院)